新設された地域組織への地元住民の参加に関する一考察

―Y地区クラインガルテンの“田舎の親せき制度”を事例として―

Consideration about Participation of Local People in Newly Established Regional Organization

-In case of "Rural Supporters' System" in *Kleingarten Y*-

○北村さやか*　牧山正男**　井上真美***

KITAMURA Sayaka, MAKIYAMA Masao and INOUE Mami

１．はじめに

近年，都市農村交流の地元側の受け皿にすることなどを意図して，農村地域に新たな組織を立ち上げ，そこに地元住民を参加させる事例が見られるようになってきた．このような組織は，うまく機能すれば，新たな地域活性化への糸口になることが期待される．その反面，計画段階や組織化の過程などが不完全であった場合には，組織が十分に機能しないばかりか，組織に組み込まれた地元住民に不要な物理的・精神的負担を背負わせることになりかねない．

本報ではX県Y町のY地区クラインガルテン（以下，KG-Y）における地元住民組織「田舎の親せき制度」を事例として，地元からの参加者を集めた過程および彼らの当初の参加意志などを整理し，それらが彼らのその後の行動にどのように関係したのかについて考察する．

２．調査の対象と方法

KG-Yは，2004年4月に開園された．20区画の農園それぞれに宿泊可能な小屋が附設されており，利用者は40万円の利用料で年間契約する．

Y町は開園にあたって，都市住民との交流による地元住民の意識改善などを目的とした．その手段として利用者個々への農作業支援などを目的とした「田舎の親せき制度」という組織を新設することを計画した．利用者20組に個々に対応するために，組織には地元住民20人を参加させることが図られた．しかし，既報[1)]で指摘したとおり，(i)地元集落の専業農家のみを組織の人員の対象とした，(ii)そのために少ない対象者から，しかも開園まで短時間での人員集めを余儀なくされ，それゆえに人選や調整が不十分だった，(iii)組織の所属や責任体制が不明確であったために，初動段階においてすでに組織の管理や人材育成が放任されてしまった，といった点が見られた．なお，地元住民の「田舎の親せき制度」への参加は，無償である．

本報ではこのうち特に(ii)の影響について検討するために，「田舎の親せき」20名への悉皆的な聞き取り調査を行った．調査は2004年（開園1年目）12月から翌年1月に行った．また2008年（同5年目）時点での各地元住民の田舎の親せき制度への参加状況についても追跡した．

３．結果と考察（Table 1）

(1)地元住民個々が組織に組み込まれた経緯

4とおりの経緯，3つの時期に大別される．

①地域内の立場などにより，「田舎の親せき制度」が計画策定された2002年度より前から，ワークショップなどに参加（No.1～2）．

②地元集落在住で，KG開園予定地に併設の直売所に出荷している専業農家が，計画された後（2003年夏頃）に勧誘された（No.3～4）．

③主に地元集落の専業農家が，以前から私的な集まりを組織していた．その大半が，同じく2003年夏頃に組み込まれた（No.5～13）．

④開園直前の2004年春に，「地元住民20人による組織」とするべく，私的集まりのメンバーだったのに若年であることや地元集落以外在住であることから③では除外された者や，高齢者などが組み込まれた（No.14～20）．

*茨城大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Ibaraki University, **茨城大学農学部 College of Agriculture, Ibaraki University, ***東京農工大学大学院連合農学研究科 United Graduate School of Agricultural Science, Tokyo University of Agriculture and Technology
キーワード：クラインガルテン，地元住民組織，参加

(2)地元住民個々の組織参加への積極性

2004年度の調査時点における組織参加への積極性について，A：組織の役割（利用者との関わり）に積極的に，楽しみながら参加，B：立場ゆえの義務感，C：積極的ではないが言われたことには従う，D：頼まれたので参加したが，できれば辞めたい，E：知らないうちに組織に組み込まれたが，KG自体に嫌悪感があり，参加意志がない，の5タイプに分類した．

その結果，①，②は能動的なA，Bに分類された．全員が2008年時点で組織への参加を継続している．一方，③の9人中4人，④の7人中4人が，消極的なDに分類された．EのNo.13は，組織の目的からすれば異常だと思われる．なお，No.13の他に，No.11，12，19，20は，「利用者への対応は面倒，避けたい」などと述べていた．

④の中ではNo.14，15が特徴的である．No.14は若いことを理由に③の時点では組み込まれなかったが，もともと人との交流を好む人であった．No.15は2004年度時点での積極性はCに分類されたが，高齢ゆえに耕作できずにいた遊休農地を一部の利用者が借りたことを契機として，利用者との交流の楽しさを体得した．

(3)地元住民の組織へ参加における留意点

KG-Yの場合，既報で述べた(ii)を主因として，乗り気でないD，Eの地元住民まで，員数合わせ的に組織に組み込まれた．本来はD，Eのような者を無理に組み込まないように留意した上で，Cのような中間的な者をNo.15のように積極側へと移行させることが望ましい．

たとえば，開園初年度は収穫祭（年間最大のイベント）への参加呼びかけが運営側により行われたが，2年目以降は田舎の親せきたちの自発性に任された．No.15のように利用者との接触が積極性へと寄与するのだとすれば，こうした機会をなるべく活用するようにしたい．

引用文献 1)北村さやか，牧山正男，井上真美（2009）：滞在型市民農園利用者への地元支援体制を計画する際の注意点，農村計画学会春期大会梗概集.

Table 1 「田舎の親せき制度」参加者たちの参加経緯と意向，行動など
Details, intention, and behavior, etc. of "Rural supporters' system" participants

No.	年齢	参加の経緯*				'04年度当時の積極性**					収穫祭参加			'08現在	備考（特徴，発言など）
		①	②	③	④	A	B	C	D	E	'04	'05	'06		
1	49	○	+	#		○					○	○	○	継続	妻が女性農業士で，早期より関与
2	39	○		#			○				○	○	○	継続	集落出身の町会議員として関与
3	59		○	#		○					○	○	○	継続	KGに隣接した農地を所有
4	41		○	#			○				○	○	○	継続	「よい取り組み，協力したい」
5	58			○			○				○	○			代表，管理主体に強い不満
6	50			○				○			○				
7	49			○				○			○			継続	
8	43			○				○			○				
9	48			○					○		○				「管理主体に不満」
10	45			○					○		○				「管理主体に不満」
11	42			○					○		○				「管理主体に不満」
12	37			○					○		○	○			
13	40代			○						○					KG自体への嫌悪感を表明
14	33			#	○	○					○	○	○	継続	若年のため，遅れて参加
15	70				○			○			○			継続	所有農地を利用者に貸し出し
16	37				○			○			○				
17	74				○				○		○	○			「高齢なので，替わって欲しい」
18	67				○				○		○	○			「高齢なので，替わって欲しい」
19	64				○				○		○				「高齢なので，替わって欲しい」
20	45			#	○				○		○				他集落のため，遅れて参加

*参加の経緯（参加時期）：①計画策定（2002年度）以前，②直売所への出荷者（2003年夏頃），③専業農家による私的集まりのメンバー（2003年夏頃），④開園直前の員数合わせ（2004年春）.
**調査（'04年）当時の組織への参加の積極性：①積極的に・楽しみながら，②立場上の義務感ゆえ，③積極的ではないが言われたことには従う，④できれば辞めたい，⑤嫌悪感を明言.
+は直売所出荷も実施していた．#は上記の私的集まりのメンバーでもある.